



左：振替運行バスで見かけた少女。中と右：振替運行に使用されたバス2台。

6. ペーチ

地下鉄乗り換え

GPS (Global Positioning System: 衛星利用全地球測位システム) の軌跡を調べると、10号線をブダペストへ向かい、出発後約20分の間隔で10号線を逸れPiliscsév駅、Piliscsaba駅に停車し乗客を拾った後、10時10分前にピリシュヴリュシュヴァー駅着だった。乗客全員がざわざわ動き出したので、此处が振替輸送の終点だと判断し流れに続く。

100人くらいが乗り換えたと思うけれど、二両連結の座席に余裕があり最後尾から行っても坐ることができた。ディーゼルカーだが比較的新しい車輛らしく、運転席を覗いてもその雰囲気強い。バスによる

代行輸送は上手く行ったらしく、数分後にはブダペストを目指して発車した。

車窓からの明媚な郊外風景や田園風景を楽しみながら走る。20分でドナウ河を渡り乗り換えるブダペスト・ニュガティ(西)駅が近いことが判る。10時40分頃到着した。ペーチへ行く列車はブダペスト・デリ(南)からの発車なので地下鉄を利用して駅間を移動することになる。

この地下鉄利用に関して、インターネットであれこれ調べたところ、「アンダンテ」という名でブダペストにある日本人経営ホテルが発信する情報が詳細でかつ信頼度高そうだった。ともかくデアーク広場駅からブダペスト東駅へ二回利用したときには問題なかったものの、ニュガティ駅からデリ駅へ行くにはM3線からM2線への乗り換えが必要で、アンダンテ情報は切符が二枚必要だとしている。

金額的には大したことがないものの、「二枚切符を買っておいたにもかかわらず、刻印機の所在が判らざうろろしている内に罰金を取られた。」など、不安を煽るようなことが書かれている。そこでもう少し追加情報を求めてあれこれ検索する内に、ハンガリー政府観光局東京事務所の、「乗り換えはできません。ただし、有効時間内であれば地下鉄相互間での乗継は可能です。」を見付けた。有効時間とは90分間らしい。情報の出所からして信頼性が高そうだ。



ピリシュヴリュシュヴァー駅を発車後間もなくの車窓風景。

地下鉄小史

地下鉄が世界史上最初に運行されたのは1863年1月10日にメトロポリタン鉄道のパディントン駅〜ファリンドン駅間の約6kmで、特殊な蒸気機関車により車輛が牽引された。

1896年にブダペストでも本格的地下鉄が開業した。ブダペスト地下鉄は当初から電化されており、これは地下鉄としては世界で最初の電化路線であった。

さらに1898年にはボストン、そして1900年にはパリにおいて開通した。ベルリンでも1880年頃には地下鉄を通す計画が存在したものの反対勢力によって計画が遅れ、開通は1902年であった。

イスタンブル・トンネル(現地ではテュネルと呼ばれる)は1875年開業なので、これをヨーロッパ大陸最初の地下鉄とみなす説もあるが、この路線は地下ケーブルカーという特殊な方式であり、かつ全長も573メートルしかない。

ついでに書けばアンダンテが最初からでたため発信したわけではなく、ただ情報の更新を怠っていたらしい。ともかくアンダンテに対しメールで、「提供している情報に誤りがあること。」を指摘した上で修正を奨めたところ、しばらくしてお礼と、「正しい情報を発信していけるよう、定期的に見直し更新させていただきます。」との返信があった。

閑話休題。一抹の不安は残っていたが、有

人窓口で320 Ft (118円)の切符をカードで購入した。この切符だけでデアーク広場駅乗り換え、問題なく南駅へ達することが出来る。

駅の印象を較べるならば、東駅は重厚、西駅の洗練、南駅ならば鄙びたであろうか。しかし案内表示などは良く整備されている。これに導かれて地下から地上二階の切符売り場へ移動した。ちなみにこの切符売り場は南駅の中で例外的に洗練された感じがする。スペースも充分だし、窓口の数が多くて一列並びを実行している。東駅の国内線切符売り場とは大違いだ。

ブダペストからパーチまで228キロの切符は乗車券3,950 Ft (1,451円)、急行指定券が505 Ft (185円)だった。此处もカードで支払いする。切符を買い終わって時計を見ると11時20分だった。

パーチ行きの発車は11時56分なのでトイレを観察がてら訪れ、用を足しておく。このトイレも有料だったが、料金は記録し忘れて不明となった。

トイレ検分を済ませて、パーチ行きが発車する5番線ホームへ行くと、列車は既に入線していた。日本ならばおおむね発車の10分ぐらい前にならないと入線しないが、こちらでは半時間前から乗車できる。私のようにせっかちな性分には適しているようだ。



ブダペスト・ニュガティ(西)駅。「世界一美しい駅」との情報を散見するが、何に準拠するのか不明だ。しかしこの情報を事前に得ていたら、駅の外観を撮影したと思う。惜しいことをした。



ブダペスト・デリ(南)駅の切符売り場。一列並び方式。



南駅の有料トイレ。小便器の間隔はかなり広く、目隠し板の類は全くない。ヨーロッパは大の方でもろくに目隠しが無いところがあるから、羞恥心の感じ方が違うのかもしれない。個室にトイレトペーパーはなく、入口付近の大ロールから必要分を予想して切り取り個室へ持参する。



車窓風景。上：1時19分。中：1時32分2秒。下：1時32分16秒。



ペーチ行き二等車の車内。発車半時間前でもかなりの乗客がいる。

時間的余裕は気分的な余裕となり、列車の様子を見物しながら指定された23号車の32番を探した。二等車は一等車の座席配置(二列、通路、一列)に比べ若干狭いものの快適さにさほどの差はない。そもそも料金が23%程度の違いなので当然ともいえよう。

定刻ピタリに発車した列車はしばらくブダペスト近郊住宅地の間を走り、半時間ほどすると大平原の中に出た。このような見渡す限りの大平原は、日本で目にすることがない風景のため単純にある種の感銘を受ける。

こうなると地形は同じようでも植生や耕作の状況が変わるたびに撮影意欲をそそられ、結局60ショット近くシャッターを切ってしまった。コストの掛からないデジタルだからこその成り行きだ。しかしハンガリーの列車も窓ガラスが汚れたままで、かなり画質を低下させる。それでもポルトガルやブルガリアに較べれば幾分ガラスの汚れは少なかった。

到着時刻が近くなり、車内放送があったので、後ろ座席のオヤジに、メモを見せながらペーチか訊いたところ、「このままで良い。」みたいなジェスチャー。要するに列車はペーチが最終目的地だった。

ホテル・フニックス(Fönix: 不死鳥)

ペーチの宿は英ガイドの推奨と平面図を参考に、鉄道駅から楽に行けることを重視して選んだ。例のごとく予約を宿のオヤジに頼もうかと思ったが、一昨日街歩きを始める前に、半ば暇に任せて



ブッキング・コム(ブダペストの宿を予約したサイト)で探すと簡単に見付かった。改めて利用者のクチコミを読んでも比較的好評なので、とにかく二



ホテル・フニクス。ほぼ真ん中部分にある角の左側が玄関。(宿の自己紹介では)有名な建築家サンドラ・デヴィニ(英語読みだとデビン・アレクサンダーとなるらしい)の設計。確かにかなり風変わりだ。ちなみに彼は私と同じ1948年生まれ。

泊することで予約をしておいた。

英ガイドの平面図と首っ引きで慎重に進む。駅から宿への最短路からは一本間違えてしまったが、ほぼ問題なく到着できた。しかし宿の玄関が判らず、同じ建物に入居している食堂の従業員達に訊くと、ボーイが親切に建物反対側の玄関まで案内してくれた。どうやら宿と同経営の食堂らしい。

玄関を入ると僅かなスペースがあるだけで正面の階段により二階へ誘導される。此处に小さいながらもカウンターを備えたフロントがあり、快活な青年が笑顔で迎えてくれた。用意されていた部屋を下見すると(7号室。エステルゴムとたまたま同じ番号)はツインで裏路地を細い窓から見下ろ

す粋な部屋だ。此处に泊まることにしてチェックインを済ませた。荷物を収めると英ガイドから近場の食堂に目星を付け食事に出かける。

向かったのは宿から徒歩2分の食堂ドームだ。近さもさることながら英ガイドに、「幅広い料理を出す、特別なのはステーキで、ペッパーからシャトーブリアンまで揃っている。」に惹かれる。これを読んで久しぶりにステーキが食べたくなった。

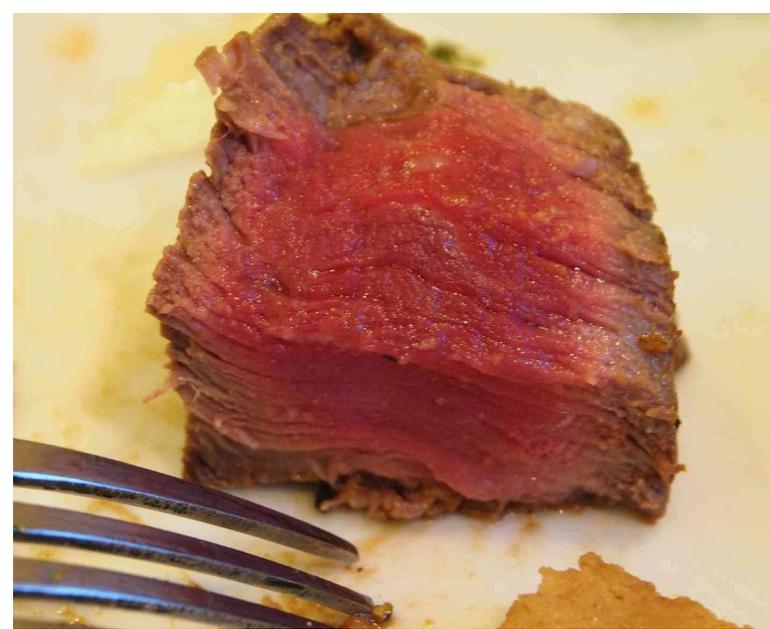
つい先ほど駅から歩いた道を逆に辿る。セイチェーニ広場の南端で左折しちょっと行くと左側に *dóm* の看板が見える。店内にいた先客は奥の方に二人だけ、既に食事を終えたのか、はたまたお茶を飲みに訪れたのか、六十代の女性が静かに話し込んでいた。

複数語お品書きを見て、迷わずテンダーロインステーキにする。野菜の付け合わせもあるらしいので、サラダなどは頼まずハウスワインをグラスで貰った。

当然ながらワインはすぐもたらされ、ステーキは長時間待たされる。しかしこれは覚悟の上で、



上: 閑散とした店内。下: テンダーロインステーキと付け合わせ野菜。



ステーキの焼け具合。

分厚い肉塊にじっくり火を通し、美味さを損なわずむらなく焼き上げるのに王道はなく、根気よく面倒を見ながらじわじわ焼くしかない。

待つ間にワイン二杯が空になった。注文してから20分ほどしてようやくステーキが登場。一瞥して想像していた以上のものと期待が膨らむ。うかつなことに訊かれなかったので焼き加減を指定していない。これが気がかりでおそろおそろ肉塊の端にナイフを入れ確かめた。

数ミリが焼けて茶褐色になり、そこから中は赤身が中心部へ向かうほど色の鮮やかさを増してゆく。だからといって真ん中辺りが冷たいようなことはなく、正に理想の焼き上がりだった。

追加のワインを飲みながら、テnderロインを堪能する。時刻は既に4時を廻り、8時の朝食後何も食べていないことも、この場合は良い方に働いたようだ。最後は、「もう少し食べたかった。」と思いつつ皿の上から総てが胃の腑に移動していた。いつも以上の満足と共にカプチーノを頼む。

勘定はステーキ4,450Ft(1,634円)、ワイン600cc1,560Ft(573円)、カプチーノ390Ft(143円)で、合計6,400Ft(2,351円)は内容の充実を思えば随分安い。カードで支払ったが600Ft(220円)ほどのコインをテーブルに置く。

店を出ると既に4時半を回っていた。気温は10℃だが無風で歩いているとちょうどそよ風を浴びるような具合になり気持ち良い。辺りには灯点し頃の雰囲気が漂い、このまま宿へ帰るのは勿体ないような気がする。食堂の面しているキライ通りを西へ向かった。

沿道には商店や飲食店が軒を連ね、どうやら街で一番の繁華街らしい。店のレベルも比較的高いようで、さしずめ銀座通りか。規模はそれほどでもないが、格調高い建物を見付けて近付いてみると、ペーチ国立劇場だった。こんな建物ならば似合う演目はオペラだろうか。しかし恥ずかしながら国内外を問わず、ちゃんとしたオペラを見たことはない。

国立劇場の少し先には双頭の鐘楼を備えたバロック形式の教会があった。「ペーチで最高のバロック様式の歴史的建造物」(ハンガリー政府観光局)と云われているリツェウム教会だ。ドアを押してみると入ることが出来た。ミサは行われていないが、20人くらいの信徒がベンチに腰を下ろし、思い思いに祈りを捧げている。



リツェウム教会

壁際の告解室には数人の行列が出来ていた。今回使用しているミラーレス一眼レフは比較的シャッター音が小さいので、このような場面で使用するには向いている。しかしなんと云っても信仰の場で部外者が撮影するのだからなるべく迷惑にならないよう心掛けた。

教会を出てからも1時間弱散策を続けた。最後に宿と隣接している小さな食品店で晩酌のツマミを追加する。ロールパン45Ft(17円)、ハム110g 223Ft(82円)、オリーブの実瓶詰、140g 259Ft(95円)、ヨーグルト125g 4箇 279Ft(102円)、ミネラルウォーター1.5リットル 115Ft(42円)、ミルク1リットル 219Ft(80円)など。

宿へ戻り晩酌の前にメールその他をチェックするべくWi-Fiを繋ごうとするが上手く行かない。試しにネットブックを持ってフロントへ行くと此処ならば大丈夫だ。要するに位置(距離)関係のせいらしい。チェックインしたときと同じフロントマンがいたので、彼に談じ込み結局14号室と替えて貰った。広さは変わらないものの、屋根裏部屋だ。しかし使い勝手や居心地は悪くない。



灯りの点ったランタンを下げた歩行者をこちらで見かけた。足許を照らすためではなく、何らかの意味があるらしいが尋ねる相手もなく不明のまま。



落ち着いてメールをチェックするが、大したものはない。しかしPCでインターネットに接続しているのだからと、フェイスブックに、先ほど食したテンドーロインステーキのことを書き込み、画像も添えて投稿した。後は晩酌を済ませて安らかに睡眠。

夜中に目を覚まし、熱気を感じたので室温を測ると26℃ある。スチーム暖房を絞ったが、朝7時で25℃もあった。

ペーチ大聖堂と初期キリスト教墓地遺跡

翌朝も高曇りの好天気だった。8時20分になって、三階にある朝食堂へ行く。ちなみに14号室も三階で、最短距離に行くことが出来れば10メートルくらいなのに、途中をプライベート(宿が客を



朝食堂。中心部に輝いているのは朝日を受けた丸窓。



上:朝食のテーブル。右側に置かれたお品書きにはハムエッグなど9品目が載り選べる。下:お品書きから選んだ、スクランブルエッグとウィンナソーセージ。



ホテル・フニックスの外観。大きなガラス窓が2階部分で、丸窓や天窗が3階部分。ちなみに丸窓が朝食でエアコン室外機隣の天窗が私の部屋なので、水平移動できれば近い。

たか疑わしいような薄っぺらなものだ。城壁に沿ってカールヴァーリア通りがあり、交通量はかなり多い。ペーチは旧市街への車乗り入れを制限はしていないようだが、旧市街に用事がなければ、この外周道路の方が快適に走れるので、上手い具合に棲み分けがされているようだ。

排除して占有するエリア)に遮られているため、一旦二階へ下りてフロントの前にある階段を登り直さなければならない。

この建物は有名建築家が設計しただけのことはあり、使いやすいとはいえないにしても、風変わりで個性的な面白さがある。寝室はともかく朝食堂などにはこの傾向がはっきり出ている。テーブルには皿に載せられたロールパンだけが用意されていた。声をかけるとオバサンが顔を出したので、スクランブルエッグとウィンナソーセージにカプチーノを所望する。

数分でもたらされたスクランブルエッグは、あまりスクランブルされた形跡のないものだったが、別に気にせず食べる。10分ぐらいで簡素な朝食を終えた。

9時半になって天気も良いことだしともかく街歩きに出かける。ちなみに旅を始めてから10日ほど経過し、下着類は手洗いしてきたが、カッターシャツをそろそろ洗濯したい。ホテルがランドリーサービスを行ってればそれを利用するし、駄目ならば街で洗濯屋を探すことにして、レジ袋にシャツ、そして下着や靴下を入れた。

フロントにはチェックイン時と同じフロントマンがまだいた。洗濯について尋ねると、「やっているが、今日は係りのオバサンが帰ってしまったので明日になる。」との返事だ。この宿にもう二泊するつもりになっていたから、ここで洗濯を頼むことにしレジ袋を預ける。

この街の見所は、まず世界遺産にも登録されている、「初期キリスト教墓地遺跡」やペーチ大聖堂、ジヨルナイ陶磁器博物館などだろう。しかし明日も丸々見物に時間を使えるので、旧市街を囲んでいた城壁に沿って歩くことから始めた。

宿の玄関が面しているフニャディ・ヤーノシ通りを北へ向かうと200メートル強で城壁がある。15世紀に築造されたらしいが実用になっ



城壁。

道幅は十分な余裕があり、その上に車道から少し離れて幅広の歩道がある。日本だったら、車道に圧迫された狭い歩道だったり、それさえもないところが多く、羨ましく感じながら歩くのだった。

しばらくして城壁越しに四角い四つの尖塔が見えた。大聖堂に付属するもので鐘楼なのだろうか。尖塔は同一設計のように見える。規模としては大きいものの印象が希薄というか大味だ。ブダペストの聖イシュトバーン大聖堂やエステルゴム大聖堂にも共通する、「とにかく規模的に負けないものを作る。」意志ばかり感じられ空疎な印象が残るのだった。

大聖堂付近を過ぎてしばらく行くと、城壁は南へと折れ曲がり、外周道路もロータリーを介した十字路になっている。壁沿いの遊歩道をそのまま辿って行くと、バービカン(英: Barbican。城門などを守るために作られた円形の小砦。中国だと甕城(おうじょう)。現存するものではワルシャワやクラクフにある(バルバカン)が有名だ。15世紀頃から各地に建設されたものの、大砲の威力が増すにつれて意味を失う。)があった。

15世紀の築造で城壁と共に作られたのだろうか。司教座のあったこの街を守護するために建設されたそうだが、実戦に使用するには貧弱すぎるのは城壁にも共通することだ。フニャディ・ヤーノシュが率いるハンガリー十字軍は1456年にベオグラードを包囲した兵力にして約三倍(諸説あり)のオスマン軍に対して大勝利を収めた。以後70年ほどはトルコ軍のハンガリー侵攻はなかったらしいので、この時期に建設された軍事施設はそれほどの切迫感がなかったのかもしれない。ちなみにベオグラード戦の勝利を喜んだカリストゥス3世が、支配下の教会に対し正午に鐘を点くことを命じた。これが習慣となり現在まで引き継がれているらしい。またヤーノシュの息子が後に国王になったマーチャーシュでブダの丘上の教会にその名を残している。

それはさておき、バービカンのところで城壁も途切れたので、進路を旧市街内部へと変更する。司教館や大聖堂が並び、その南側は緑地が多く、公園のような雰囲気だ。あまり興味を惹かれなかったものの、まず左手にある大聖堂を見物することにした。玄関部分で入場料を支払う。800Ft(294円)で切符替わりなのかレシートが手渡された。教会に入るのに課金されるのはハンガリーに来て三回目だ。



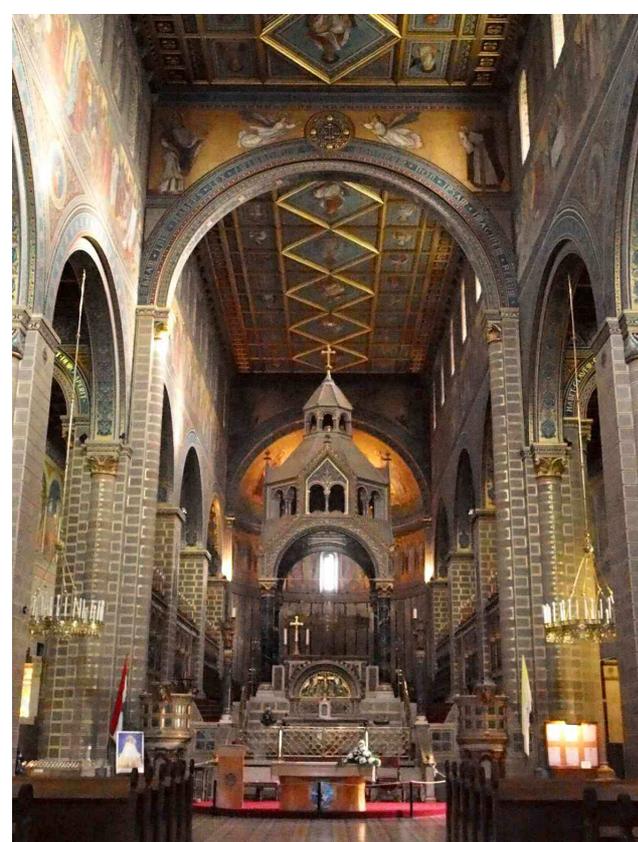
城壁越しに見るペーチ大聖堂。



バービカン。



ペーチ大聖堂。



ペーチ大聖堂内部。

この場所に教会が出来たのは11世紀初頭でのことで、ハンガリーに建立されたキリスト教会としてはごく初期のものだ。しかし同世紀中頃に焼け落ち、同じ位置に再建された聖堂はそれから増改築を繰り返し、現在のものは19世紀末に改築されたネオロマネスク様式の巨大な建物である。地下には11世紀に建てられた礼拝堂が残っている。

日ガイドには、「内部は驚くほど美しい。」と記述しているが、私の感想としては、「外観同様大味でつまらない内部。」だった。巨大な堂宇内を一応ぐりと廻り、地下の礼拝堂へ降りる。上に較べると清楚な感じは好ましいものの、なぜか信仰の場として使われなくなって久しいような印象を受けた。裏付けのない単なる印象だが、それに従って云えば、パンノンハルマの地下礼拝堂の方が宗教的雰囲気満たされていた。

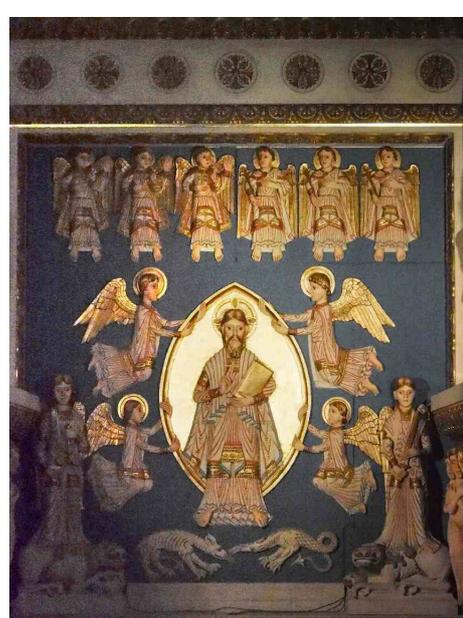
15分ほどで大聖堂巡りを終え外へ出る。世界遺産である「初期キリスト教墓地遺跡」の入口はすぐ南にあるはずだが、見ることに迷いがありカープタラン通りをぶらぶらと東へ向かった。この通りも博物館などが多く、土曜日のせいもあるのかシーズンオフにしては観光客風が多かった。

結局20分ほど遠回りをして墓地遺跡入口に戻ってきた。せっかくなので世界遺産だから一応は見物しようと思ったためだ。ちな

みになぜ迷ったかと云えば、初期キリスト教に対して(私の偏見かもしれないが)カルト的なものを強く感じて嫌いなためだ。教祖(キリスト)以下、初期の聖人はそのほとんどが殉教している。このようなことは他の宗教には見られないことだし、死様の壮絶無残なこともカルト的印象を色濃くする。

そんな戸惑いもあったが、入口は明るくロビー風でおどろおどろしい雰囲気など皆無だ。若い女性が三人カウンターで入場者を捌いている。此处で入場料を支払う。撮影料300Ftを加算して1,500Ft(551円)だった。

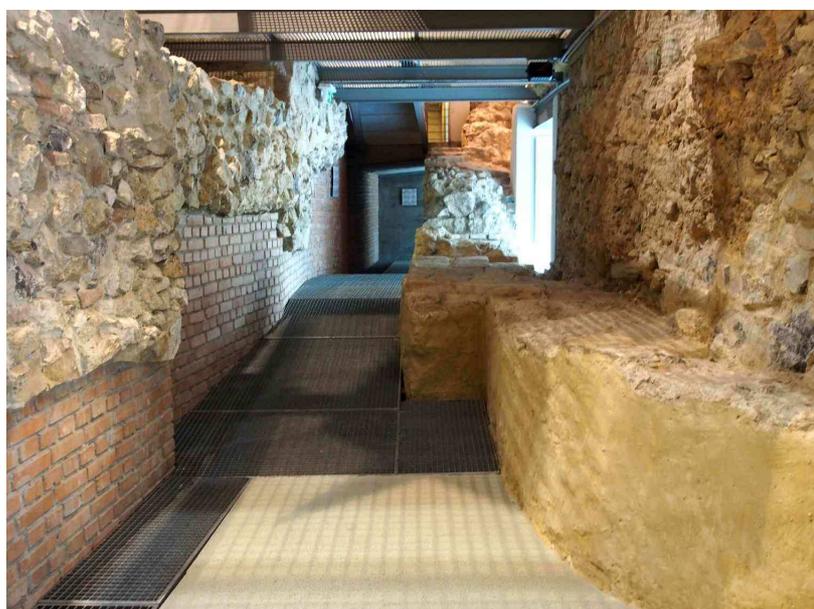
内部は予想以上に見易く、かつ遺跡の保全にも配慮された施設になっている。やはり世界遺産と云うことになる、ユネスコの管理が厳しいのだろう。



地下礼拝堂への通路で見たレリーフ。

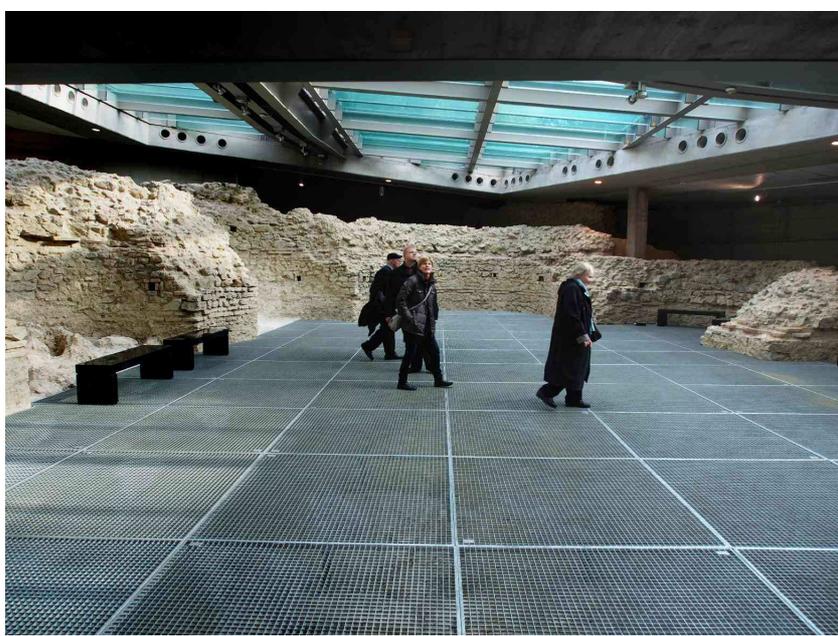


初期キリスト教墓地遺跡入口。



発掘された通路。右側の明るくなっている部分がCella Septichora。

レセプション部分を抜けるとすぐに Cella Septichoraと呼ばれる広間の遺跡がある。壁は発掘された当時の状態と思われる高さが1メートルから3メートルでそれ以上はない。この壁の外側は往時の通路が復元されていたり、新たに設置された通路などがあり広間を外側から観察できる。一方広間内部のスペースはグレーチング(grating:鋼材を格子状に組んだもの。主に道路の溝蓋などに使用される。)を使用し底面保護のため少し離して足場を作ることにより立入も出来る。



広間跡。天井部分が現在の地表面。ガラス張りで雨除けと採光の役割を果たしている。

順路は広間の横を通り奥へ続く。一番奥に聖ペテロと聖パウロの地下礼拝堂があった。壁の上部や天井のアーチに描かれた絵は、損傷が甚だしくほとんど何を描いたものか



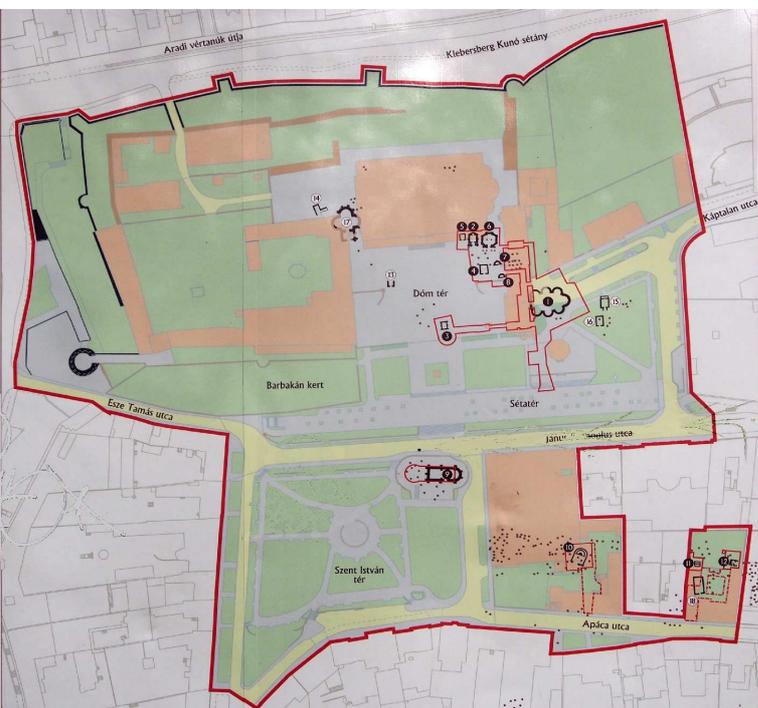
左: 聖ペテロと聖パウロの地下礼拝堂天井アーチのフレスコ画(?) 右: 解説板の所に掲示されている天井アーチ画復元図。

判らないが、そばに設置されている解説板には内容と復元図が掲示されている。それによれば4つの丸いに描かれているのは地元の聖人だそうだ。

遺跡全体では16のユニットからなる大規模な共同墓地ネクロポリスで、墓の数は全部で100くら

いになるらしい。しかし公開されているのは極一部で、順路を辿って100メートルくらいのものだろうか。半時間たらずに表へ出てしまったが、それなりに興味深いものだったし、地下共同墓地から想像していた陰湿さが全くなかったことも好印象に繋がった。二千年近い歳月が人間くさを洗い流してしまったのか、そもそも私の先入観が見当違いだったのかもしれない。

公園をのんびり横切り、沿道に商店や飲食店が散在するオパツォ(Apáca: 尼僧)通りを抜けて市街中心部へ向かった。



公園の中で見つけた遺跡平面図。(多分)赤太線内が遺跡全域で、赤細線内が現在公開されている部分。



ウインドウショッピング。リンゴ1キロ250Ft(92円)。オレンジ1キロ499Ft(183円)。ジョルナイ磁器壺(高さおよそ50cm)1,342,900Ft(493,233円)。

ペーチは観光的資源からすると大聖堂や初期キリスト教墓地遺跡が主たるものだが、産業的には陶磁器が重要らしい。ハンガリーの窯業ではヘレンドが有名で日本にも随分輸入されているようだ。しかしこの近辺のブランドであるジョルナイも日ガイドによれば、「ハンガリーではヘレンドよりもジョルナイの方が一般になじみがある。ブダペストの高級レストランではほとんどがジョルナイの皿を使っている。」とのことだ。話半分としてもかなり有力なブランドらしい。

オパツォ通りからイルガルマショック通りへ移った辺りに、このジョルナイ直営店があった。どうせ買い求めることもないし、陶磁器に興味もないから店内に入ることはなかったが、それでも一応ショーウィンドーは覗いてみた。目立つ位置に置かれた壺は50万円近い。しかしジョルナイの魅力はその低廉さらしく、同じサイズのヘレンド一級品は10倍くらいの値になるようだ。

イルガルマショック通りは昨日駅から宿へ向かったときに歩いたのだが、これを逆に辿り、幹線道路のラーコーツィ通りにぶつかった。この通りには商店が多いようなので左折してみると、100メートルほど行ったところに大型スーパーマーケットがある。

営業時間を調べると、今日は土曜日なので午後2時で閉店、明日は休みだ。酒が不足しているのでもかくこれは調達しなければならない。品揃えや値段を見ながら店内を一通り巡回する。買い求めたのは赤カブ1束149Ft(55円)、ウオッカ700cc2,399Ft(881円)、ミネラルウォーター1.5ℓ79Ft(29円)、ヨーグルト125g4筒279Ft(102円)、パン39Ft(14円)。だいぶ荷物が重くなったので一旦宿へ向かう。

宿のそばまで来て、昨日利用した食料品店の営業時間も調べてみた。平日は午前5時から、土曜は午前6時から午後9時まで。日曜は休み。ジュール、パンノンハルマでの経験と合わせると、ハンガリーで休日は基本的に買い物が出来ないと覚悟した方が良さそうだ。それにしても開店時間の早いことに驚く。



földszint

KONZUM SZUPERMARKET
hétfő-péntek 6³⁰-19
szombat 6³⁰-14

スーパーマーケット。上：白菜1キロ489Ft(180円)。赤カブ1束149Ft(55円)。中：卵10筒479Ft(176円)。下：看板を見ると生協だった。営業時間は平日午前6時半から午後7時。土曜6時半から午後2時。日曜休み。開店が早朝なのはパンノンハルマ同様だ。

食堂アフィム

買い込んだ物を宿に置くと、既に時分どきだ。しかし食欲の方がもう一つだったので、メールを見たりして時間を潰し、再度出発したのは12時45分だった。向かったのはイルガルマショック通りに面している食堂アフィムだ。昨日利用した食堂ドームも良かったけれど、料理の選択肢が限られていたし、アフィムは英ガイドが、「特にお奨め」としていたことも背中を押した。

通りから階段を下った地下1階が店だ。構造からするとワイン貯蔵庫を改造したらしい。12時40分ぐらいだったが客はおらず、若いウェイトレスとオーナー夫婦らしい中年男女が愛想良く迎えてくれる。

渡されたお品書きにはマジャール語以外に、ドイツ語、英語、そして(多分)スロバキア語が記載されている。スープ、レタスサラダとケバブにして、ハウスワインは赤をグラスで頼んだ。

ウェイトレスが去った後、他に客がいない気軽さもあって店内を見て廻った。それほど金をかけているとは思えないが、かなり凝ったアンティーク



県庁舎。屋根や4階部分外壁の装飾にジョルナイタイルが使用されている。このように建築に利用されるのがジョルナイの特徴で、19世紀末の名建築家レヒネル・エデンが嚆矢。タイルを屋根に使用している例はブダペストのマーチャーシュ教会にも見られる(P.14参照)。



食堂アフィムの店内。

装飾になっている。柱時計、ラジオ、肖像画を中心とした絵画、ポスターなどが、地下の貯蔵庫跡という容れ物と調和して良い雰囲気醸成していた。

スープは10分も待たされたので、何か特に手を加えたかと思ったが、食べて判るようなことはなかった。メインのケバブがスープの20分後だ



上左: スープ。上右: ケバブ。下左: レタスサラダ。下右: カプチーノ。



食堂のそばにあったお茶屋のショーウィンドー。着物(和服)をイメージしているのだろうか？

外壁の漆喰絵。かなりの出来映えだが、較べれば日本の鏝絵の方が数段勝るだろう。

ったから、あまり間隔が開きすぎないように調整したのかもしれない。それぞれ美味かったもののそれ以上特筆するようなこともない。ともかく小一時間の昼食を楽しみ最後にカプチーノを一杯。

勘定はスープ540Ft(198円)、サラダ490Ft(180円)、ケバブ1,690Ft(621円)、ワイン200cc 3杯1,020Ft(375円)、カプチーノ330Ft(121円)だった。合計4,070Ft(1,495円)を現金で支払い釣りの430Ft(158円)をチップにする。

店を出てこの日は昼寝をする気にもならず散策を続ける。イルガルマショック通りからキラライ通りへ曲がり西へ向かった。19番地の2階外壁を飾る漆喰絵に目を惹かれた。調べてみると19世紀に鉄を商って財をなした人の邸宅らしい。20分も歩くと通りの雰囲気も場末となったので踵を返した。戻る途中で、「同じ道を歩くのも芸がない。」と平行する一本南のペルツェル・マイクロシ通りに移動したが、あまり収穫はなかった。

なおも1時間ほど散策を続けた。露店が並ぶ小路があり、売られているカーペットを見たらカフカス産だったり、Sushi Fanなる鮭レストランを発見したり、散策としては退屈しなかった。郵便局の屋根には感心したものの、逆光のためあまり上手く撮れなかった。

宿へ戻るとフロントは二十代中頃の女性に替わっていた。明日もう一泊することの了解を求め、これは簡単に済んだ。これで月曜日にホッロクーへ行くことが決まり、宿の予約を彼女に頼む。例のごとく英ガイド当該宿をマークしての依頼だ。

英ガイドの掲載電話番号が誤っていたなどのトラブルはあったが、彼女は即座にインターネットで検索して電話番号を確認するなど、てきぱきと依頼されたことをこなす。予約が成立して電話を切るとこちらへ向き直り、「ホッロクーでバスを降りたらこの番号に電話すればオーナーが迎えに来てくれる。」とメモしてあった番号を渡してくれた。



郵便局。三階建て建物の屋根部分。ジョルナイトイルが使用されているが、それにしても郵便局とは思えないような絵柄だ。

日曜日

翌日の11月11日も好天気が持続する。しかし訪れてみたい場所を思いつかないまま時を過ごし、10時半になって、とにかく散歩がてら表へ出た。北へ少し行き、「博物館通り」と呼ばれている(日ガイド)カープタラン通りを歩く。日曜日のせいか、昨日などより家族連れの姿が目立つような気がした。

最初に立ち寄ったのは現代ハンガリー絵画館だった。これは面目ない話だが、ジョルナイ(陶磁器)博物館と間違えての入場で、そもそも現代絵画には興味を持っていないでいる。

入場券売場で雰囲気がおかしいとは思ったものの、入場料500Ft(184円)と撮影料300Ft(110円)も合わせて支払った。展示を見てははっきり違うと気付く間抜けさだが、大した作品の量ではないのでとにかく一通り見物して行く。現代絵画に対する無関心を考えれば、「意外に楽しめた。」のだけれど、見物した時間は10分程度だった。

絵画館を出て、カープタラン通りから大聖堂前公園(私の命名)を漫ろ歩く。大司教館南側の遊歩道を辿り、塀に設けられた潜り戸が開いているのに気付いた。中に入ってみると、大司教館に入ることは出来なかったが、バービカンへの通路があり自然にそちらへ導かれた。

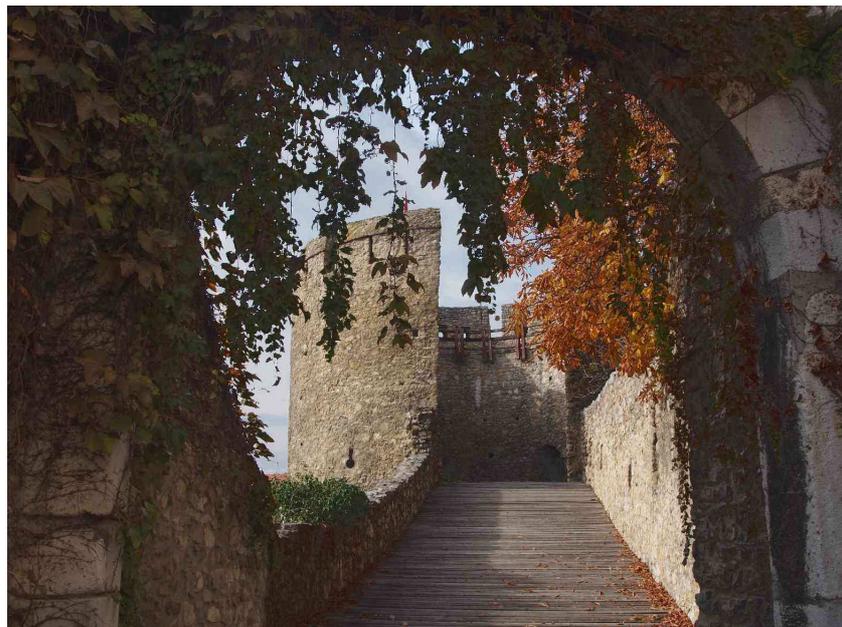
中から見ると、「貧弱だ。」のイメージは強まる。若い女性観光客が一人訪れ、無言のままコンパクトデジタルカメラで数枚撮影し、つまらなそうに去っていった。

公園からオパツォ通りを抜けてヨーカイ通りを歩く。既に辿ったことのある通りだけれど、何となく雰囲気が好きで散歩道として選んだ。中ほどにある四階建ては、今でこそ落魄した感じが強いものの、新築だった100年くらい前はかなり人目を惹いたことだろう。

ヨーカイ通りからスーパーマーケットの裏になるコシュート広場にも廻ってみた。閉まっているのは判っていたが、昨日とは打って変わり広場に人影がないのは予想外だ。ハンガリーでは日曜日を安息日として過ごすのが一般的なのだろうか。



上:宿から貸して貰ったテーブルタップ。持参している変換コンセント変換アダプターにコーナータップ4個口を着けて、ネットブック、携帯充電器、カメラ充電器、単三充電器に配電しようとする、この宿のコンセントからは抜け落ちてしまう。そこでテーブルタップを要求すると、探し回った末埃を浴びてごついが、充分役立つものを見付けてくれた。下:現代ハンガリー絵画館の展示。



大司教館の庭からバービカンへ通路が設けられていた。



ヨーカイ通りの今は落魄したビル。



店内。昨日とは反対側を撮影。右端にあるブラウン管テレビは日本なら骨董品だが、こちらではひょっとすると現役かもしれない。

すでに12時近かったので、昨日と同じ食堂アフィムに向かった。ハンガリー郷土食にも少し飽きたので軽くスパゲティーを食べるつもりでいたが、お品書きを見ていると、前日からほぼ私の専属もどき状態のウェイトレスがお奨めがあるという。示されたカードは各テーブルの上に置かれているもので、マジャール語のみなので読めないが、彼女の説明によると二日間の限定特別メニューらしい。

グース料理がメインで、スープ、デザートにワイン200ccが組み合わさり3,900Ft(1,432円)、だと云う。量的に多過ぎるし、甘いものはいらないので一旦は断った。しかしさらなるお奨めにスープとデザートをなしにして、メインとワインだけの組み合わせならばどうか訊いてみる。交渉は上手くまとまり、限定記念メニューの簡素版となった。

待つ間に店内を再度見物する。この日も他に客がいないので、気兼ねなく歩き廻り撮影することが出来た。趣味的にはそれほど好みではないものの、オーナーの徹底ぶりに敬服する。

ワインを飲みながらメインの登場を待つ。定食に近いようなものだったせいか、10分ほどでグース料理が運ばれてきた。そこそこ美味かったことと、肉から骨を外すのに手間が掛かった印象は残っているが、それ以上は記憶にない。

半時間強で綺麗に平らげる。ホッと一息ついていると、ウェイトレス

がケーキを持ってきて、「ボスからのサービス。」と提供される。甘いものは苦手だから、手を付けたくないところだがせっかくの好意を無にもできず、「胃袋は満杯だし、甘いものは苦手なので...」と言い訳して、一切れだけは食べた。



断面が見えるように食べかけのケーキ。

最後に締めのカプチーノを飲んでいるとオヤジ、女将、ウェイトレスがコートを着て店の外へ行く。彼女の退勤かと思い、サヨナラのつもりで手をちよつと挙げたら、用事があると解釈したらしく、コートを脱いでこちらのテーブルに来る。タイミング的には良かったので勘定を済ませた。グース料理定食2,950Ft(1,084円)、追加ワイン200cc2杯680Ft(250円)、カプチーノ330Ft(121円)の合計3,960Ft(1,454円)。キャッシュで支払い、別途500Ft(184円)をチップにする。

しばらくして店外へ出ると、表のテラス席で三人ともタバコを吸っている。店内禁煙が厳しく守られている様子はブルガリアと大違いだ。それにしても厨房で換気扇を回して吸えば、客席からは絶対判らないと思う。査察とか罰金などがあるのだろうか？

宿へ帰って一眠りしようと、セーチェニ広場まで来て、白日のもとで改めて見る市庁舎の豪壮さに歩みが止まった。いかにペーチがハンガリー第二の街であるにせよ、人口16万弱の規模を考えると、豪奢すぎるようにも思われる。調べてみると、この街は19世紀から20世紀初頭にかけて繁栄したらしい。付近に炭鉱があったことから、製鉄業や製糸業が起こり、さらに製糖工場とビール醸造業もこれに続いて発展した。かのジョルナイも1868年に陶磁器工房を開いている。



セーチェニ広場から見る三位一体像と市庁舎。

宿でしばしの午睡を楽しみ、3時半近くになって外出した。朝つまらぬ間違いで見ることのできなかったジョルナイ磁器博物館に対して、失敗ゆえに未練に似た感情が湧き上がり、改めて訪ねることにした。

宿の玄関から博物館は僅か徒歩2分の至近距離だ。博物館通りに面して設けられた門をくぐると20メートルほどのアプローチが博物館へ導き、これに沿ってライオン像が置かれてあった。ともかく1枚撮影。建物に入り、すぐの券売所で入場料1,200Ft(441円)と撮影料300Ft(110円)を支払う。



ジョルナイ磁器博物館の庭に置かれたライオン像。

展示場に入り、日ガイドにも画像が載っていたアヒルが置かれていたので撮影しようとしたら電池切れだ。通常はカメラバッグかデイパックの中に予備電池などを入れて常時持ち歩くのだが、この博物館に関しては甘く見たと云おうか、カメラだけの軽装備だった。宿は指呼の間だから入口で事情を話して一旦外へ出ても、再入場は許されただろう。しかしそこまでして撮影したいほどのものもないと、あっさり諦めてしまった。



1906年ミラノ万博で使われたアヒル。インターネットより。



ポップヴェレ通りから見た夕焼け。尖塔は大聖堂のもの。

先ほど庭で撮影したとき電池切れになればおそらく宿まで戻ったと思う。ごく僅かな違いで撮影できなくなり、午前中間違えて絵画館に入ったことも合わせ、「陶磁器博物館との縁が薄いのだな。」とひとりごつのだった。

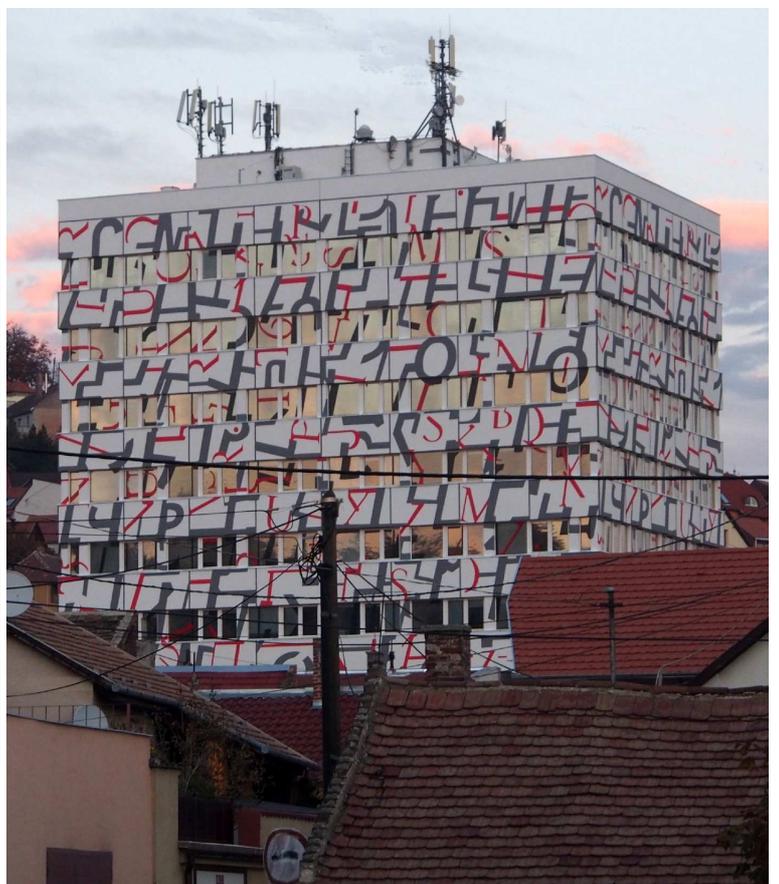
そんなことでジョルナイ陶磁器を一通り眺めたものの20分ほどで終わってしまった。しかし晩酌にはまだ早いので、宿へ戻って電池を交換し、相変わらずカメラだけの軽装備で街歩きを続行した。

カープタラン通が西へ延びたポップヴェレ通りを西へ向かった。この街で足を踏み入れていない地域なので目新しいものを期待してのことだ。しかしとば口で振り返ったときの夕焼けは美しかったものの、後はこれと云って目を惹くものもないまま場末を思わせる家並みとなった。

ターゲットを城壁に変更し左折する。緩い坂を登ると間もなく城壁があり、近世になって道路のために築造されたいらしい門をくぐり、外郭道路であるセンターゴト・イヤーノシュ通に出た。車道は城壁から10メートルほど離れ、城壁との間にできた空き地に遊歩道あるいは踏み分け径がある。

この小径を東へ向かうと緩い上り坂になった。ちょっとした峠に達し、前方の視界が開けると突然正面に夕焼けを背景にした大聖堂の尖塔がシルエットになって浮かび上がる。予期していなかった分、この不意打ちは嬉しかった。天候、時期、時刻の三拍子が揃って初めて巡り会えるので、10分ずれても駄目だったと思う。

乗り物などで移動中にこのような被写体と出会えば、焦ってひたすらシャッターを切り続けるような羽目になる。この時は徒歩だったし、周囲に余人もおらず撮影環境としてはまず最上だったと云えそうだ。



城壁外130メートルほどの所にあった風変わりなビル。ちなみに以前は平凡な外見だったようで、インターネットで見るストリートビューでは文字はなく、白い部分が黒一色となっている。



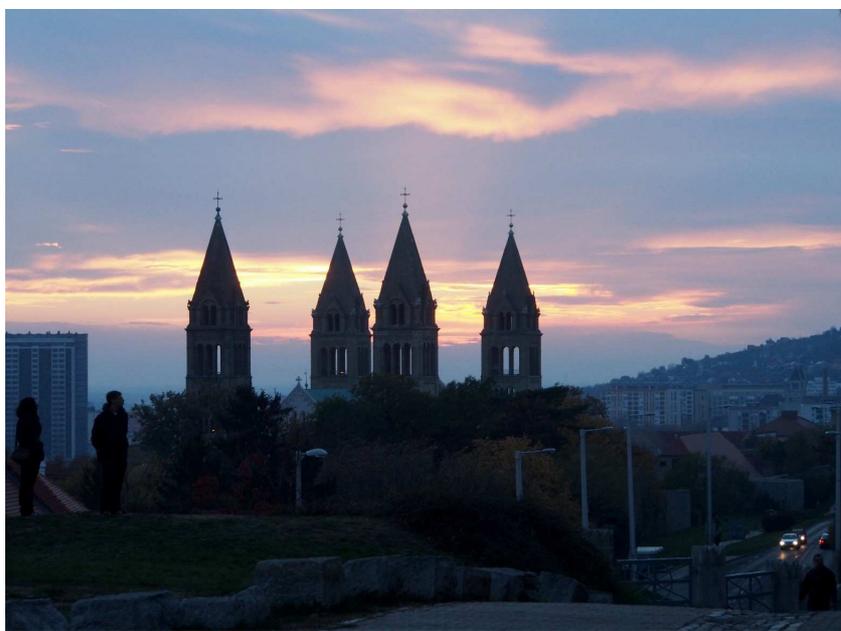
夕焼けと大聖堂尖塔のシルエット。

加えてデジタルカメラの有り難さ、撮影結果を目視しながら露出やホワイトバランスなどを調整できる。数枚の試行錯誤で露出を2段階少なくするのが効果的だと判断した。露出が決まると、今度は撮影位置を微妙に変えてみる。これによって4基の尖塔がその重なり具合を微妙に変化させる。

撮影後に落ち着いてから数えると17ショットで、それに要した時間は2分57秒だったが、撮影している際にはもっと長いように感じていた。

峠を下って城内に入る。すぐにカープタラン通と交差しこちらへ右折した。日没後の柔らかい光に、街灯のナトリウムランプのオレンジ色が交じり、散歩をもう少し続けたいような風景になっていた。度々歩いている、カープタラン通りから大聖堂前公園、オパツォ通り、キライー通りなどを半時間ほど巡り、宿へ帰り着いたのは5時を廻っていた。

フロントでレジ袋に入った洗濯済み衣類を受け取る。料金は



最初に撮った1枚。



日没後の大聖堂前公園。

2,000Ft(735円)だった。大抵のものにレシートをよこす(地下鉄の切符でさえ)この国でなぜかレシートなしだ。預けたとき云われた、「今日は係りのオバサンが帰ってしまった...」などと考え合わせれば、宿として正規の業務ではなく、ルームメイドオバサンの副業なのかもしれない。



セーチェニ広場、4時42分。